

近代文学研究叢書
第十九卷

昭和 37 年 12 月 15 日 印刷

昭和 37 年 12 月 20 日 発行

昭和 51 年 10 月 20 日 二刷

[¥ 3 0 0 0]

著者

昭和女子大学近代文学研究室

発行者

坂本 由五郎
東京都世田谷区太子堂 一―七

印刷者

大文堂印刷株式会社
東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地

発行所

東京都世田谷区太子堂 一―七
昭和女子大学近代文化研究所
振替口座東京 一七〇八六七番
電話 (422) 五 一 三 一 八 番

近代文学研究叢書

第十九卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村本宮保人浜能成中内辻玉島山佐佐笹佐坂齋木河金片荻岡太上石池

田松間内 見 勢瀬林 井田 伯藤沢^々本 藤 簪子子桐^原 田井森田田
坂 徳 藤村 宮 木由 俣 井
澄定久秀 圓 頼正謙 幸謹 梅幹美 一 実武健顯^保 三磯延吉亀
太 泉

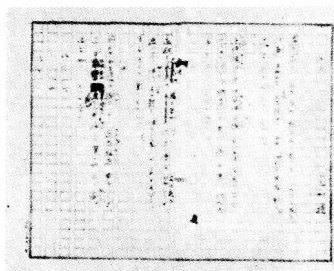
夫孝雄雄都吉郎賢勝二濯鑑助二允友二明郎郎寛修英雄二智水生郎吉男貞鑑

(国語学) (近代文学) (英語学) (国文学) (近代文学) (美国文学) (近代文学) (英文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (仏文学) (歴史学) (国文学) (和歌文学) (俳文学) (近代文学) (比較文学) (英文学) (児童文学) (国文学) (国文学)

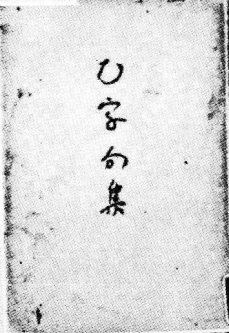
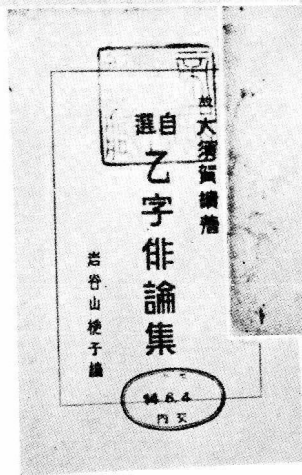
大 須 賀 乙 字

乙 字 肖 像 →

「炬火」—大正六年四月刊（昭和女子大学蔵）↓



→ 「自選乙字俳論集」—大正十四年五月刊（国立国会図書館蔵）
↑ 乙字筆蹟（大須賀まつ氏蔵）

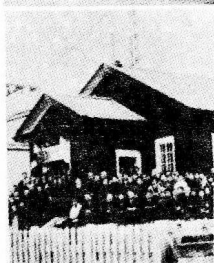
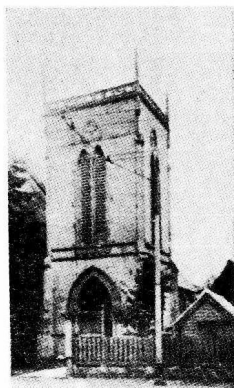


「故人春夏秋冬」—大正七年四月刊→
（昭和女子大学蔵）
中段中，「乙字句集」—大正十年五月刊
（昭和女子大学蔵）

中段右，京都嵐山大悲閣山中にある句碑，乙字十三回忌の昭和七年一月に建設

J・H・バラ

バラ肖像



上段左，海岸教会旧会堂

上段中，バラ博士記念会堂

下段左，海岸教会仮会堂

横浜海岸教会

昭和八年三月竣工

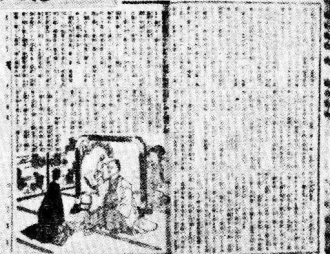
外国宣教師宿舍跡

昭和二十九年四月建設

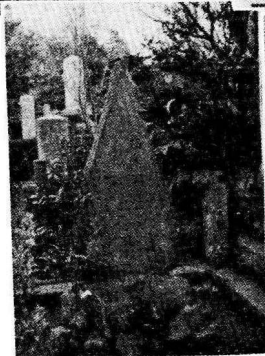
須藤南翠



→ 晩年の南翠（右）と家族（左、眞金氏）
南翠伝所載（昭和女子大学蔵）



上段左、「おぼろ月夜」—昭和二十三年十一月刊
（昭和女子大学蔵）

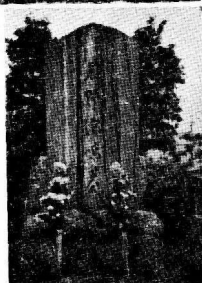
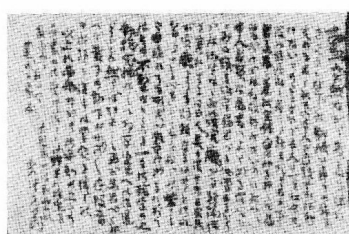


「緑叢談」—明治十九年十月刊
（昭和女子大学蔵）

上段右、「照日葵」—明治二十一年七月刊
（昭和女子大学蔵）
上段中、「愚禿親鸞」—明治四十三年五月刊
（昭和女子大学蔵）
↑ 開花新聞二三号、明治十六年四月七日に掲載の
「昔語千代田刃傷」
（昭和女子大学蔵）

岩 野 泡 鳴

明治四十五年八月芝区長宛「竹腰幸との離婚届提出に關しての書簡」(岩野藻氏藏)
「悲恋悲歌」——明治三十八年六月刊 (昭和女子大学藏)



東京都文京区雑司ガ谷墓地にある泡鳴の墓



「放浪」——明治四十三年七月刊 (昭和女子大学藏)

上段右、「神秘的半獸主義」——明治三十九年六月刊 (昭和女子大学藏)

下段右、「発展」——明治四十五年七月刊 (昭和女子大学藏)

中央、泡鳴肖像 (明治三十九年撮影) (昭和女子大学藏)

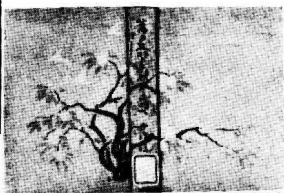
川 臨 澤 中

← 臨 川 肖 像

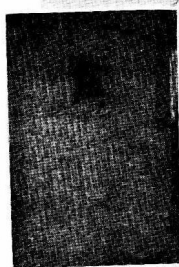
「旧き文明より新しき文明へ」一大正
四年十一月刊 (昭和女子大学蔵)



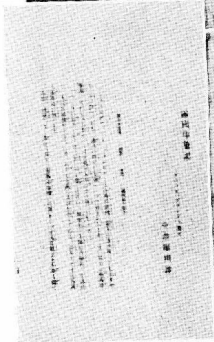
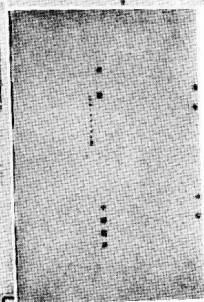
「ベルグソン」——大正三年十
月刊 (昭和女子大学蔵)



「トルストイ」——大正二年五月刊
(昭和女子大学蔵)



↑ 「恋」やまびこ二号、明治三
十五年六月所載 (昭和女子大学蔵)



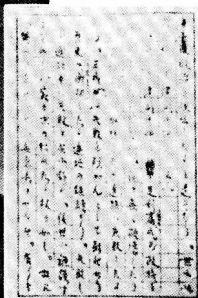
「露国印象記」新思潮二号
——明治四十年十一月所載
(昭和女子大学蔵)

「古蹟」七人二号、明治三十七年
十二月所載 (昭和女子大学蔵)

黒岩 涙 香

涙香肖像（昭和女子大学蔵）

楠木正成に関する遺稿の一部明治四十三年頃の作（黒岩良恵氏蔵）



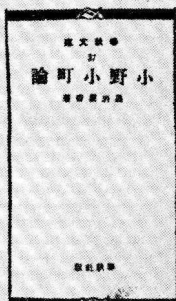
「政体各論」明治十五年十二月刊

（江戸川亂歩氏蔵）

天人論

黒岩周六著 全

物質の本性
宇宙の實體
人生の覚悟
道徳の根柢
靈魂の未來
宗教の眞趣
問題の解決



「無慘」明治二十三年二月刊（江戸川亂歩氏蔵）
上段左、「天人論」明治三十六年五月刊（昭和女子大学蔵）



中段中、「片手美人」明治二十三年二月刊
中段左、「小野小町論」昭和五年七月刊（昭和女子大学蔵）
「法廷の美人」明治二十二年五月刊（昭和女子大学蔵）

目次

口	繪	昭和女子大学近代文学研究室……(二〇)
第十九卷の成立……	例……	昭和女子大学編集室……(二七)
凡	大須賀乙字	……(一九)
J・H・バ	ラ	……(二五)
須藤南	翠	……(一五)
岩野泡	鳴	……(二七)
中澤臨	川	……(三三)
黒岩涙	香	……(四三)

第十九卷の成立

本巻は大正九年一月から同年十月までに歿したバラ、乙字、南翠、泡鳴、臨川、涙香等に関する調査を収めた。

乙字大須賀續は明治十四年福島県相馬郡中村町の漢詩人大須賀筠軒の長男に生まれ、二高を経て東京帝大国文科に入学、四十一年卒業後、曹洞宗大学講師、東京音楽学校教授となり、俳句はそれより先、仙台第一中学在学中から親しみ、日日新聞、日本新聞、国民新聞等の俳句欄に投句し、三十七年東大在学中碧梧桐、井泉水、六花等と交り、その作品も格段の進歩をとげ、「荷休めの牛の背干す冬至哉」、「干草に静まる蠅や夏の月」「角を磨く牛木隠れに冬日かな」「木揺れうつる障子に月のいざるまで」「火遊びの我れ一人ゐしは枯野かな」など秀れた句を次々に発表して着想と表現に新しい境地を開いた。四十一年「アカネ」創刊号に「俳句界の新傾向」を発表し、碧梧桐等の句風に新鮮味あることを発見、これを紹介して世の注目を引き、四十二年には「故人春夏秋冬」を選んで名句を紹介、又「石楠」、「懸葵」等の俳誌に「俳句の研究」「俳句調子論」及び「季節象徴論」を発表、季感、季語を唱えて季節文学として俳句の特性を明らかにし、俳句の内容律を論じて二句一章論に及び、写生について新たに写意を提唱するなど従来単調にうんでいた俳壇に新しい見解と解釈を加えて反省と刺激を与え、時の俳壇に新展開を促しつつ俳論家として不動の地歩をきずいた。その後碧梧桐

等の新傾向に反発を感じ「懸葵」、「蝸牛」等にこれを難じて俳句の復古を説き芭蕉をたたえた。大正三年より奥の月山をはじめ中尊寺、十和田湖、八郎潟、信州八ヶ嶽、出雲大社を旅行、爾来「人生と表現」「石楠」「常磐木」「懸葵」等の俳誌に俳論を掲げ、「雄弁」の選句をした。この間「乙字俳論集」「乙字俳句集」が出版、代表句に「帆の端のひたりて行くや春の水」。大正九年一月病歿。享年四十歳。

ジェイムズ・ハミルトン・バラ(James Hamilton Ballagh)は一八三二年(天保三年)九月、アメリカのニューヨーク州デラウェアのホバルト市オテル湖畔に生まれ、熱心なキリスト教信者の両親の許で信仰の道に入った。一家がロックランド・カウンティのタヴェンホルトに移住、そこで教育を受け、十二歳の時ニューヨークに移り、薬種屋に奉公していた頃中国在留のギュッラフの伝道報告を読んでいたく感動し、外国伝道に大きな興味と関心を持つようになった。その後福音の使徒を志し、一八五三年ラットガーズ大学を経て、ニューヨーク・ウィック神学校に学び、宗教書を携えて巡回伝道にも従った。卒業の翌年一八六一年五月、マーレット・キネアと結婚、その六月北部長老教会から日本伝道の命を受け、夫人同伴で帆船カセイ号で出航、六カ月の航海後の十一月横浜に上陸、すでに宣教師として来日していたブラウン、ヘボン等の寄宿先なる神奈川県成仏寺に仮寓、いかに伝道に熱心であっても、当時の日本の宗教界の状況では他の宣教師と同様伝道など受けつけなかったので、しばらくは僕婢などに日本語を習っていた。

文久三年幕府の命により横浜に移ったバラは、布教の第一歩として居所の隣りに私塾を開き、十数名の青年

を相手にエジソンのリーダーや英文法、万国史などを教え、傍ら聖書の講義を行った。最初十数名だった塾生も次第に増加して四十五名にも達し、その中には寺内正毅や得能通昌もいた。塾では讃美歌は原文のまま教えていたが彼によって一部が翻譯され、又奥野呂綱と共訳の「廟祝問答」を出版した。これは支那における信仰の問答書であったがこれが伝道に用いられた。しかしこの英学塾も明治四年遂に閉鎖の止むなきに至ったが、これがあったため七八年頃の英学塾全盛期の地ならしになった。閉鎖の翌年横浜居留地一六七番地小会堂で日人だけの祈禱会を行った。バラ塾の栗津高明や小川康之助等十一名が集ったが、これが日本キリスト公会の前身で、バラがその座みの親であった。五年に牧師となり十一年まで在任、彼によってバプテスマを受けた人々は、さきの十一名の他に矢野元隆、鈴木貫一、杉山孫六、熊野雄七等多数にのぼった。牧師を辞してからには自ら進んで神奈川県下及び伊豆、信州をはじめ各地で信仰を広めあまたの篤信者を作ってキリスト教思想とその文化を普及した功は大きい。大正八年（一九一九）米国に帰り、その翌年リッチモンド市のマカルビン夫妻の看護のもとに同年一月、八十八歳の伝道の生涯を終えた。

須藤南翠は安政四年伊予宇和島藩士須藤但馬の次男に生まれ、明治三年父が大参事職を去るにおよんで、江戸より藩に帰り、貫進生を志して明倫館に学び転じて松山師範学校に入った。卒業後三戸浜小学校で教鞭をとったが、事情あって出奔、名を土屋郁之助と改めて放浪生活を送るうちに有喜世新聞の記者となり、毒婦物「新葉おみな」「茨木お滝」を執筆、十一年同紙が開花新聞に改まるや籍を同社に移し、「千代田之刃傷」を

連載して認められ、再び改進黨新聞となった頃「黄金花籠」を発表、その時代の新しい小説として好評を博した。デズレリーの翻譯小説や坪内逍遙の写実小説に親しみ、「小説神髓」等に動かされる一方、矢野龍溪をはじめとする政治小説熱が高まるに及んで「照日葵」「緑簑談」や「新粧之佳人」「囂の旗風」を発表し、明治維新を舞台に繰り広げられる政治や外交問題並びに新知識や政治趣味を持ったインテリ女性を登場させたり、女性改良、男女交際や流行をテーマに稗史的結構で当時の社交など加えて和洋折衷の新小説として世に迎えられた。二十一年「新小説」創刊に関係し、長篇「驪月夜」(明三)は時事や西欧の探偵物の手法や趣向をとり入れた探偵物、その翌年著作集「こぼれ松葉」二冊を出版した。改進黨新聞退社後大阪朝日に招聘され、同紙に小説「現世相」「五月闇」や脚本「竹中半兵衛」「英一蝶」を発表したのを始め、爾来十余年間同紙上に作品を連載、三十八年退社後は上京して東京朝日に寄稿の傍ら「高僧伝叢書」を執筆、「法然上人」「蓮如上人」「日蓮上人」「空海」「愚禿親鸞」を出版、晩年腎臓を患い同九年二月、大阪で逝去、享年六十三歳。

岩野泡鳴は明治六年一月、淡路国州本町の徳島藩士の家に生まれ、小学校卒業後十五歳で大阪の泰西学館に学び、やがて父の巡查辞任に伴って上京、明治学院で一時修学、その後政治家を志して神田専修学校(専修大学の前身)に入り、経済、法学を学んだ。この頃獨歩、三治、咄堂等と雑誌「文壇」を発行、誌上に新体詩及びエマアソンの歴史物を翻譯、のち仙台の東北学院在学の頃はエマアソンに親しみ、中退後上京し冥想風の詩劇「魂迷月中刃」を著し、又巖本善治の「女学雜誌」に評論や詩を発表、歌舞伎新報の編集にもたずさわった。

この頃竹腰幸と結婚、三十四年第一詩集「露しも」を自費出版、人間の暗黒面や獸性、苦悩や懷疑にふれ、三十七、八年の第二詩集「夕潮」第三詩集「悲恋悲歌」を著し、三十九年小説の処女作「芸者小竹」を発表、更に「神秘的半獸主義」では「すべての表象は一刹那の顛地で自身の身を刹那に食うのが人間の本来の内部的必然」と刹那を重視し、大胆にも肉欲を讃美したために教職を抛つて止むなきに至った。四十一年「闇の盃盤」で自然主義的な象徴詩、翌年「新自然主義」及び愛欲を正面から描いた「耽溺」を公けにし、独自の自然主義を打ち出し同年六月樺太で事業を企てたが失敗し、窮追中に書いた「悲痛の哲理」は婦京後好評を博した。更に、遠藤清子と同棲し、北海道生活から取材の「放浪」「断橋」以下長篇五部作を発表、大胆で卒直で作者即ち主人公という一元描写で醜面を曝露、文学即人生の立場をとった。ために社会上に問題を起したが創作では視野を広げた。ついで大阪新報の記者となって下阪、アーサー・シモンズの「表象文学運動」をはじめ当時の作品に見るべきものが多い。「新体詩作法」と「新体詩史」を併せ学位論文として東大に提出したが否認、大正五年雑誌「日本主義」を起し、個人主義的国家主義を唱えた。大正七、八年は最も活躍した時代で「浅間の霊」「法学士の大蔵」等有情滑稽物や「征服被征服」「実子の放逐」の自伝物など発表、「僕の描写論」「描写論補遺」「一元描写の實際的証明」の諸論文で、平板な描写を指摘し、文学即生活論の中心人物となって論争の渦を巻き起すなど多くの光彩を放った泡鳴も同九年五月東大病院に於て病歿、享年四十八歳。

中澤臨川は明治十一年長野県上伊那郡南向村に生まれ、南安曇郡梓村中澤家の養嗣子となった。松本中学、

二高を経、東京帝大工科大学電気部に入学、在学中から窪田空穂、水野葉舟、吉江孤雁、小山内薫等と共に雑誌「山比古」を創刊、第一号にユーゴー作の「セダンの回顧」罪惡史末段を翻譯、三十七年「審美私説」「信仰の廊清」を明星に、シャトウブリアンの「古蹟」を「七人」に翻譯、翌年五月文集「鬢華集」を出版、新潮にブランドスの「露国印象記」を記載して世の注目をひき、さらにニーチェ、トルストイ、ベルグソン等の紹介や評論を試みた。「新芸術観」ではベルグソン哲学の基礎である直観説、即ち理智と直観の作用と種別について述べつつ芸術的直観に及んで、ベルグソン哲学を平易に紹介してわが文学思潮界に新風を注入、さらに「新社会主義—ソリダリテの説—」を述べて、ソリダリテの原則に立脚する社会主義の誕生を期待しながら戦後の混乱期、ことに社会主義や共產主義の入り込む時代の思潮に妥当性を与えるため哲学と宗教の復活を説き、さらに「トルストイ」「破壊と建設」「近代思想十六講」を発表、四年には「臨川論集」「旧き文明より新しき文明へ」を著して社会の動きを考察し、思想及び文芸問題を扱って文壇に重きをなした。かつて東京鉄道、京浜電気鉄道の技師長、のち松本市外に中澤電気会社を設立、その経営に当り労働問題にもふかい関心をもった。半生を内省して「愛は、力は土より」「湘南養痾録」を発表、歿後に発表された小説「嵐の前」はニーチェの中年期と女性関係を描いてニーチェ観を盛り込んでいる。科学者で、文芸家の臨川は大正九年九月死去、享年四十三歳。

黒岩涙香は文久二年九月高知県安芸郡川北村の勤王家に生まれ、幼少から家塾で和漢学を修め、明治十一年